

南方（ビルマ）

回想記

大阪府 田 中 昭

昭和十九年三月十二日、教育召集（第二補充兵十八年徴集）輜重兵第四連隊（堺金岡中部第三十一部隊）に入隊。

昭和十九年四月十五日、錦師參動第一五二条により召集解除。

昭和十九年六月十二日、充員召集、大手前大阪陸軍病院編成部隊淀四〇四六部隊（第三百三十三兵站病院）に大行李として入隊。

部隊長（病院長）軍医中佐中沢悦平以下将兵四百余人。

昭和十九年六月十四日より二十三日までの間、大阪市北区寺町の寺院（宝珠院）に分宿、第一小隊第一分隊に配属、教育訓練ならびに諸勤務に服す。

昭和十九年六月十四日南方方面（セブ島）に病院開設の命令くだる。早暁四時宿営地出発、大阪駅より特別列車にて三ノ宮駅到着。

神戸港より病院船バイカル丸に乗船夜半出港。航行途中戦況急変のため、宇品港へ上陸、広島市内千田町付近の旅館に分宿。この間教育訓練等を受ける。旅館での食事は兵食とちがった特別待遇の食事で、そのあじが忘れることが出来なかった。滞在中九州方面に敵機来襲の報を聞く。そのためなのかバイカル丸は病院船を輸送船に改装される（当時黒船ともいわれていた）。

昭和十九年七月十三日、宇品港より輸送船吉野丸に乗

船（総屯数約九千屯と聞かされていた）、門司港より輸送船団二十余隻、護衛艦（海防艦）三隻にまもられ一路台湾へ。

船団は内海を出て、五島列島沖に出る。毎日むし暑い船艙のなか、蚕棚ともいえそうなところにとじこめられながら、日々を過ごす。この間炊事勤務を命ぜられ甲板上での作業。勤務中はデッキのうえで寝起き、むし風呂のような船艙から開放される。その間夜は星空を眺め教育時代の友、近藤八郎と内地のこと、過去の楽しかったことを話し合いながら夜を過ごしていた。

昭和十九年七月二十五日、数日間東支那海を航行、漸くにして台湾高雄港に近づくにつれて激しいローリング、船酔い者続出しているうちに入港。約四日停泊。全員上陸し使役（官給品バナナ、砂糖その他諸物資積込作業）ここ高雄港はバシー海峡の入り口で難所ともいわれていた。

昭和十九年七月二十九日、高雄出港一路マニラへ、夕刻緊急命令くだる。「これより先は危険区域のため全員救命胴衣着用のこと」、一瞬緊張す。私もただちに救命胴衣

を着用し待機す。

翌々日未明ついに危機到来。敵潜水艦の魚雷攻撃。その時のすごい音響とともに大きなショックを受け同時に人の叫び声、三発の魚雷が命中し船体が右舷、左舷とカタむき海水が甲板を洗い、次第に船首がググツと海中に突っ込む。そのとき船内では混乱状態となり、甲板に出てきたものは我先にと海に飛び込み、あるいは大声でなき叫ぶ少年通信兵あり、私は荒波にたたかれ無我夢中で船上より脱出。

退船数分後、吉野丸は汽笛を合図に船首より垂直になったと思ふまもなく、その姿は暗闇のなかに消えて行き悲壮なる最後であった。

時に七月三十一日午前三時四十分。

海没場所 東経一二〇・五五度、北緯一九・〇〇度の地点、バシー海峡であった。

友の死をいたむ！ 親友 近藤八郎（教育時代からの友）が脱出時、自分の帯皮をにぎりしめながらあとに続いていたが、ふとわれにかえると、近藤がいない、船と共に、あるいは海中に没したか、友と永久の別れと

なつた。いまもって脳裏からはなれようとしなない。

思いおこせば彼は大阪の久宝寺町の豆腐屋の息子で内地にいるときはよくたづねて行き、時にはバケツをさげて豆腐をもらいに行つた日のことなどが思い浮かばれてくる。

ちよつと余談になつたが、小生は流木にすがりながら十六時間漂流、この間、夜光虫がきらめくなかを約十人と円を組みお互いに励ましあい、かつまた、眠気をさますために率先して私は軍歌をうたい、それにつれて皆も一緒に歌う。互いに気合をいれながら友軍の救助を待ち望んでいた。

次第に夜も明けはじめ、強い太陽と積乱雲と青い広漠たる海原がそこにあつた。そして生き残つた人間がおのれの運命を流木等にたくしてそこかしこに浮いているだけで、そのとき雲間より敵機襲来！ 何回か旋回したあとで、降下の態勢をとる。「うたれるぞ」と思いながら海中にくぐろうとするが、救命胴衣が邪魔をしてくぐれない。手足をバタバタさせているうちに、低空でこちらに向かつてくる。機銃掃射だ！ シュンシュンと弾が飛ん

でくる。

もう駄目だと必死にもがいているうちに高波によってすくわれる。また旋回してくるようになみたが、そのまま飛び去っていく。幸いと危機をまぬがれる。そうこうしているうちにつきつきと氣力を失い、海中に沈んだかと思うと豚のように水ぶくれになって死んで浮かびあがってくる戦友をみると、急に心細くなり、自分で自分に言い聞かせるかのごとく一人で頑張る。やがて波間に海防艦らしきものがみえた。次第に接近してくる。救助にきてくれたのだと氣力を出す。

思わず手を振りながら艦に接近するが、波のため思うようにならず、艦にはすでに救助された者が鈴なりに満載されているのが見受けられる。私が再度、艦に近づくと、波に押し流され艦との距離が次第に遠ざかつて行く、到底接近は不可能と運を天にまかせ生死のさかいと、孤独感を味わいながら炎天下を漂流すること数時間ようやくして夕刻ごろ油送船（あやくも丸）が救助に来てくれた。この時こそ頑張つて生きてきたことの喜びを感じる。しかしながら助けられるまでの一苦勞、乗組

員がロープを投げしてくれるが、波のため手がとどかない。しっかりするんだと励まされ、こんどこそはと気力を出す。

やっとのことでロープをつかむことができたが、輪のなかに体を入れるのが大変、空腹と疲労とで手の力を失い何回となく海中へドボン！ そのうちに輪のなかへ入ることが出来てついに甲板へつりあげられ救助される。

甲板へあがったとたん、ふらふらの千鳥足、しっただれながら粥をすすり、ようやくにして正気を取り戻す。

戦友を探し喜びをわかちあう。時がたつに従って助かったのだという実感が体の奥底からぞくぞくとこみあげてきて、周囲の連中とやたらにしゃべりだしたい衝動にかられる。船は一路マニラへ向けて航行中。

特記Ⅱ吉野丸乗船数約五千余人

昭和十九年八月一日、比島（フィリピン）マニラ上陸兵站宿舎に入る。

昭和十九年八月十一日、本隊も兵站宿舎に到着。聞けば部隊長中沢中佐以下将兵約半数海没戦死とのこと。部隊再編成のため数日間滞在。この間沿岸荷役等の使役に

従事。一日外出許可市内見物する。

昭和十九年八月二十五日、マニラ港よりフランス丸に乗船（ビルマ方面進駐の命令を受く）

昭和十九年九月二十日、マニラ出港、一路仏印サイゴンへ。

昭和十九年九月二十七日、サイゴン上陸、兵站宿舎に入る。サイゴンで使役並びに炊事勤務に従事（梶山軍曹、西村班長と共に）、この間軍事教育あり、筆記試験があった。

昭和十九年十月十七日、サイゴン港より小型船に乗りブノンベンへ。

昭和十九年十月某日、ブノンベン着。兵站宿舎で約一週間駐留。

昭和十九年十月某日、ブノンベンより泰国バンコックへ。

昭和十九年十月二十三日、泰国バンコック到着、兵站宿舎に入る。部隊名（義四〇四六部隊）に改名（方面軍の防諜名「義」のため）、十一月一日より七日間休養並びに衛生教育等諸訓練、この間バンコック王宮参観。三日

の明治節に各自記念撮影、内地へ送る。

昭和十九年十一月十五日、バンコック出発。

昭和十九年十二月五日、ビルマ首都ラングーン、ベグーを経てトングーに到着。同時に部隊名(森第四〇四六部隊)に改名(方面軍の防諜名「森」のため)

昭和十九年十二月二十日、トングーインワン村に第百三十三兵站病院開設、病院長軍医少佐気賀沢杉人着任。航空便を利用して内地へ初めての便りを書く。部隊内の掲示板で大阪にB29の空襲の報をみる。

昭和十九年十二月五日より昭和二十年四月二十日の間、ジャングル内に兵站病院増設のため宮繕勤務並びに将校当番勤務(矢野見習士官)等にふくす。この間精励賞受賞す。前線状況悪化。衛生勤務中敵機来襲、その後数回あり。日増しに前線よりの入院患者激増す。したがってその方面の勤務にふくす。目をおおいたくなるような重傷患者。息をひきとる者、死亡者はただちに担架で埋葬をする忙しい日が続く。

昭和二十年四月二十一日、トングー地区敵機の大爆撃を受け、ジャングル内にあったわが病院も全焼、兵舎に

も口径二十ミリの人馬殺傷弾の機銃掃射を受け、そのなかを装具を屋外にはおり出すのが精一杯で、兵舎のそとに出たとたん、またしても再度低空で来襲、近くにいた他部隊の将校、兵がつぎつぎと直撃され、倒れていく。私は機銃掃射を受けながらも無意識に木の小枝を盾がわりに逃げまどうこと数分間、からうじて死境を脱出。今でも機銃掃射を受けた際の敵操縦士の顔が臉のなかにまざまざとひそんでいる。敵機が去っていく時、われにかえり、ただちに装具をつけて単壕へ、再度敵機大編隊にて来襲、爆弾投下、したからみあげると黒い固まりのようなのが雨のように降ってくる。そのようすをみると一瞬肝をつぶす。

昭和二十年四月二十二日、昨日の空襲に引き続き、今日は陸より戦車攻撃。ただちにシットタン川を渡河、攻撃音を背に聞きながら重装具を背負い一路本隊のいる集結地へ。戦友の無事な顔をみたが、石田がいらないのに気づく。どうしているのかと心配になる。小休止後、津田少尉と敵状偵察。

その後命令により転進、モチ街道にはいると荒涼た

る山道のそばには、転々と倒れている友軍の死体。それを横目で見ながらモールメンへ……転進。途中戦線を通過するときは物音立てずの行進がつづく。時折、機関銃が火をふく、友軍らしい。毎日十里の夜行軍、昼は休息、重装備をつけたうえ、急造担架での患者輸送。相当肩にくいこみ疲れるほどの強行軍。この間重傷患者の自爆が続出する。私は行軍中、矢野見習士官の伝令であった。モールメンに近い地点で熱病にかかりインド人の民家に入り休息する。国籍が違っても友好的に世話をしてくれたことを喜びに思っている。戦友にだきかかえられ非常にうれしかったが、無事モールメンに到着。その後ターモアンに駐屯。

昭和二十年七月四日、ニーケに患者療養所引継ぎのため、川田大尉以下将校二人、下上官兵二十八人派遣。引継後、葉室勤務の坪井伍長以下田村、田中二人、毎日蒸留水づくり明け暮れ。ここで水谷光治、中井政次マリヤにかかり病死、戦友と近くの場所に埋葬する。水谷は俺は長男だから絶対死なんぞ、と言っていたのが今でも耳に聞こえてくるようで、可哀相なことをしたと思

う。

昭和二十年八月十五日、ニーケ療養所にて終戦の報を聞く。この日は相当院内が動揺す。

昭和二十年八月某日、患者輸送を兼ね本隊に復帰する。

昭和二十年十月九日、本隊ターモアンよりパンボンに移駐。この間、亀田大尉の当番勤務、その後勤務交替で奥田大尉、北条主計少尉の当番勤務となる。内務班と分かれて当番班に所属、班長中谷伍長。

昭和二十年十二月十六日、湿性胸膜炎発病で入室す、間もなく自隊演芸班生れる。そのなかの音楽部門で榊がドラム代わりに醬油樽をたたき実に上手だったのがいまだに忘れられない。それに流行歌で東海林太郎の「隅田川」がよく歌われた。芝居では「臉の母」が非常によかった。入室中、他の入院患者の世話をする。

昭和二十一年六月上旬、患者輸送を兼ねて内地へ帰還の命を受く。和田大尉の指揮でパンコックより米軍上陸用舟艇に乗船、帰国の途につく。船中、和田大尉の当番勤務。海路つつがなく、数日をへて誰かの叫び声で甲板

に出ると、前方に富士山が雲間よりみえる。ああ故国に帰ってきたぞと実感がわき、非常に嬉しかった。

六月二十八日、浦賀入港。検疫後上陸、米軍の装具の検閲後、浦賀引揚援護局宿舎にはいる。復員準備。

昭和二十一年六月二十八日、復員完結、召集解除、戦友と共に（大西、北田、樹、岸、平沢）帰阪す。

この回想記の終りに際し、自隊将兵の冥福を祈る。

ビルマの密林

愛知県 稲垣金増

昭和十五年八月、横須賀海軍徴用軍属として、三重県四日市横須賀海軍建築部に入部しました。当時まだ十九歳、役場の係の人が白紙令状を持って来ました。

「御苦労様ですがなにがなんでも行ってもらはなければ。」

といわれ、国のためですからとのことで行きました。

十六年四月、徴兵検査を受け丙種合格といわれまし

た。同年九月ごろ移動があり、小笠原父島に行きました。十七年に木更津海軍建築部にかわり十八年十一月まで勤務しました。

赤紙令状を受け、十八年十一月三島野戦重砲に入隊しました。同年十二月二十五日門司港を出発、船内はなんとはいえないいやなおいでたまりませんでした。私は船には酔わないが、監視兵として高いマストのうえに登り見張りをしなければなりません。本当につらい思いをしました。約五十日位の船内の生活は、とてもつらく、いよいよ上陸との命令でシンガポールに上陸しました。

一時間ぐらいたった時、数十機の敵機の空襲にあいましたが、怪我人はありませんでした。

私たちの隊は初年兵ばかりで指揮官がおりませんでした。私達の行く本隊はどこにあるかも分かりませんでした。シンガポールでは他の隊とまざり、目的はビルマということでした。ところどころに連絡所がありましたから、その付近で寝たこともあります。

タイ・ビルマ国境にアラカン山脈があり、その山中には虎、豹がたくさんいます。私たちのそばには豹が来ま